

3. 交響曲第2番 ホ短調 作品27 (ラフマニノフ)

ラフマニノフ (Sergei Vasilievich Rachmaninov : 1873~1943) は、ロシアを代表する作曲家、ピアニストである。幼少から音楽の才能を認められ、18歳でモスクワ音楽院のピアノ科を、翌年には同作曲科をそれぞれ、たいへん優秀な成績で卒業した。

本日演奏する交響曲は「第2番」であるが、「第2番」と言うからには「第1番」があるわけで、それを22歳の時に完成させた。しかし、その初演時(1897年)に受けた評論家からの酷評によってラフマニノフは、作曲が手につかないほどの精神的な病に陥ったのである。その後、精神科医のダーリの治療をきっかけに徐々に創作意欲を回復させ、ついに、あの有名な「ピアノ協奏曲第2番」を完成させるのであった(1901年)。これが大成功をおさめると、すっかり自信を取り戻したラフマニノフはその後、1902年に結婚し、2女をもうけるなど充実した時期を過ごした。この「交響曲第2番」は、そんな時期の1907年に、家族で滞在したドレスデンにおいて作曲された。

第1楽章 Largo (4分の4拍子) — Allegro moderato ホ短調 2分の2拍子
曲は、チェロとコントラバスが序奏主題を提示して開始される。



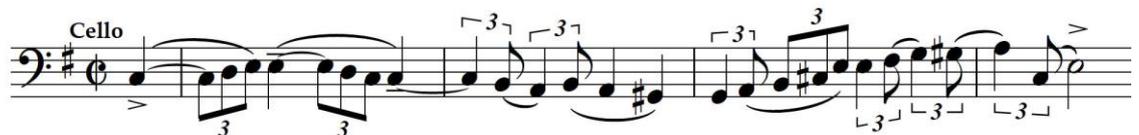
この序奏部は実に長く68小節にも及ぶ(演奏時間で約6分間を要する)。近年、国分寺フィルが演奏した交響曲の第一楽章の序奏部は、ドヴォルザークの『新世界から』が23小節であるほかは、ブラームスの第1番、シューマンの第1番『春』そしてチャイコフスキの第5番は、いずれも40小節ほどであるから、この序奏部がほぼ「序曲」とも言える充実したものであることが伺える。余談であるが、同じく Sergei (和名にするなら「茂」?) の名を持つプロコフィエフの第5番、第7番や、ベートーヴェンの『運命』、『田園』には序奏部がない。

朗々と歌い上げた序奏部がコールアングレの序奏主題で終結すると、いよいよソナタ形式の提示部に移行する。

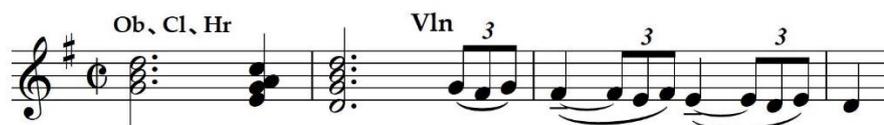
第一主題は、中低音弦楽器とクラリネット等による前奏に乗せて、ヴァイオリンで示される。



その後、シンコペーテッドな三連符のリズムが特徴的な経過句となる。



勢いが収まり、クラリネットが上昇音形を示すと木管楽器、ヴァイオリン、チェロ等によって第二主題が示される。



そして、ラフマニノフお得意の壮大な情感あふれる旋律がチェロで示される小結尾(コデッタ)を経て展開部に移行する。



第3楽章 Adagio イ長調 4分の4拍子

この楽章は、三部構成となっている。

第一部はビオラの上昇音形で開始され、それに誘われて、第1 ヴァイオリンが第一主題を提示する。



続けて、クラリネットが抒情的な第二主題を奏でる。



その後、ヴァイオリンが第一主題を強奏したのちに移行する第2部では、オーボエやコールアングレが提示する音形が主体となっている。

その後、全体終止ののち、第3部に移行する。ここでは、第1部の再現部のような構造であるが、第一主題と第二主題が重なり合って展開している。

第4楽章 Allegro vivace ホ長調 2分の2拍子

第1楽章提示部の経過句と同様に、シンコペーテッドな3連符を主体とした4小節間の前奏に続けて、第一主題が現れる。



この主題でひと盛り上がりすると、行進曲風な経過句となる。

第一主題を確保した後、息の長い勇壮な第二主題が明るく示される。



曲想が徐々に落ち着き、チェロが第二主題の断片を用いて静かに結ぶと、ヴァイオリンが第3楽章の第一主題を回顧したのちに、展開部に移行する。

再現部では経過句(第一主題部から第二主題への橋渡しの部分)の再現に展開を加えていて、盛り上がりの中で再現される第二主題は、ディナーミク(音の強弱)を *f f* (フォルテッシモ) としており(提示部では *mf*)、自信が満ち溢れているように表現している。

さらに感動的にクライマックスを形成させて移行した終結部では、テンポを上げて、第1楽章の経過句の三連符リズムとこの楽章の第一主題を融合させ、大団円となる。

以上